

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 鶴尾の山辺を歩く

講 師 山本 英之（高松市文化財専門員）

平成 2 8 年 2 月 2 8 日（日）

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 文 化 財 保 護 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 坂田郷

承平年間（931年～938年）に源順が著した『和名類聚抄（和名抄）』に佐加多という郷名が現れています。坂田郷に比定される現在の西春日一帯の土地は、北は石清尾山や室山、西は浄願寺山や小山に囲まれ、かつては香東川の流れであつた御坊川や清水川の流域に平地が広がっています。

地図を広げるとその地形は、石清尾山と浄願寺山の山裾を旧香東川がぶつかり、次第に流域が東に移ったような様相であり、流れが東に片寄るに従つてその間に河岸段丘が形成された地形に見えます。その中を一宮方面から延びる昔からの狭い農業用水路が、今でも家が重なり合う土地の間を細々と流れています。かつては、その水が豊かな水田を潤していたのでしょう。

この地の歴史は古く、3世紀後半～7世紀には石清尾山や浄願寺山に多くの古墳が造られ、8世紀の奈良時代には坂田廃寺が建てられ、仏教文化が花開きます。9世紀に書かれた『日本靈異記』（注1）には坂田の里、綾君が登場します。もしかすると、坂田廃寺の一带がその舞台かもしれません。

そして平安時代初期に真言宗再興の貢献者で、弘法大師信仰の基礎を打ち立てた僧観賢かんけん

は、坂田郷秦氏の出身とされています。その後の南北朝時代のはじめ、足利方の細川氏が挙兵した土地ともいわれています。

江戸時代になると坂田郷西春日は、高松城下から香西や琴平など中讃・西讃方面に抜ける重要な経路になりました。というのも、江戸時代には香東川の渡河地点は現在の郷東橋よりはずっと上流の弦打や飯田、成合などでした。このため、坂田郷を経由して石清尾山を南に回り込むコースも頻繁に利用されていました。

明治23年（1890年）2月、沖・勅使・坂田・馬場・万蔵の5か村が合併し鷺田村となり、昭和15年（1940年）2月には高松市に編入され、紙・上天神・三条・田村・勅使・西春日・西ハゼ・東ハゼ・松並・峰山・室・室新の12町が誕生しました。

（注1）『日本霊異記』

にほんこくげんほうぜんあくりよういき

日本国現報善悪霊異記は、9世紀の平安時代初期に漢文で書かれた日本最古の仏教説話集で、『日本霊異記』と呼ばれています。著者は奈良薬師寺の僧景戒です。

仏教の教えを判りやすく具体的に示すエピソードが多数おさめられており、物語の時代背景は、大和時代から平安時代までで、聖徳太子、行基の話、勧善懲悪、霊験、転生や当

時の庶民生活と仏教との関わりなどが生き生きと描かれています。

【布施しなかったことと、放生ほうじょうしたことによつて、この世で善悪両様の報いを受けた話】
の中に坂田の里綾君の話が記載されています。

2 坂田廃寺

古墳が造られなくなった白鳳期（飛鳥時代後半 7世紀後半）に瓦を葺いた壮麗な建物が浄願寺山の東麓に建てられました。寺名は不明のため、地名をとって坂田廃寺の名前で呼ばれています。

我が国に仏教が伝わった飛鳥時代から国分寺の建立された奈良時代までに建てられた寺院を古代寺院と呼び、当時建てられた讃岐17カ寺院のうちの1寺と言われています。坂田廃寺は、戦前から古瓦の出土などで知られていました。昭和39年（1964年）3月、推定地内の畑地から白鳳期の金銅誕生釈迦仏



金銅釈迦誕生仏立像

立像（県指定有形 県立ミュージアム蔵）が発掘され、次いで、同42年（1967年）に行なわれた発掘調査では、基壇や円形柱座の造り出しのある礎石数個、白鳳期と考えられる八葉複弁蓮華文軒丸瓦などの大量の古瓦が出土しました。この場所べんれんげんのきまるかわらで古代仏教文化が開花していたことが明らかになり、また、近くで平安時代の瓦窯跡が発掘されました。礎石は現在、天理教の建物の入り口を入った右側に高松市の文化財の看板を立てて保存されています。なお、御坊町所在の無量寿院が坂田廃寺の後身とも伝えられています。

3 片山池窯跡群

積石塚古墳群として名高い石清尾山古墳群が所在する石清尾山塊のうち、浄願寺山と小山の間の谷間に立地する片山池窯跡群は、坂田廃寺とともに昭和初期からその存在が知られていました。昭和16年（1941年）には1号窯跡の発掘調査が行なわれ、部分的ながらも窯跡遺構であることが確認されています。さらに数基の窯跡が周辺に存在している



坂田廃寺 礎石

ことが指摘されていましたが、現在では確認することができず、開発によって滅失したものと考えられています。



八葉複弁蓮華文軒丸瓦
(坂田廃寺出土)



鴟尾(片山池1号窯跡出土)



片山池1号窯跡

平成6年（1994年）には高松市教育委員会によって1号窯跡の全面的な発掘調査が行なわれました。その結果、窯は南向きの斜面を掘りくぼめて築かれており、半地下式有床（ロストル）式平窯と呼ばれるもので、出土遺物から平安時代のもと考えられます。窯の構造は焼成室と燃焼室に分かれ、焼成室奥には平瓦が10数枚立てかけられており、当時のままの姿をとどめていました。調査後、この窯跡は市史跡に指定され、覆屋をかけられて保存されています。

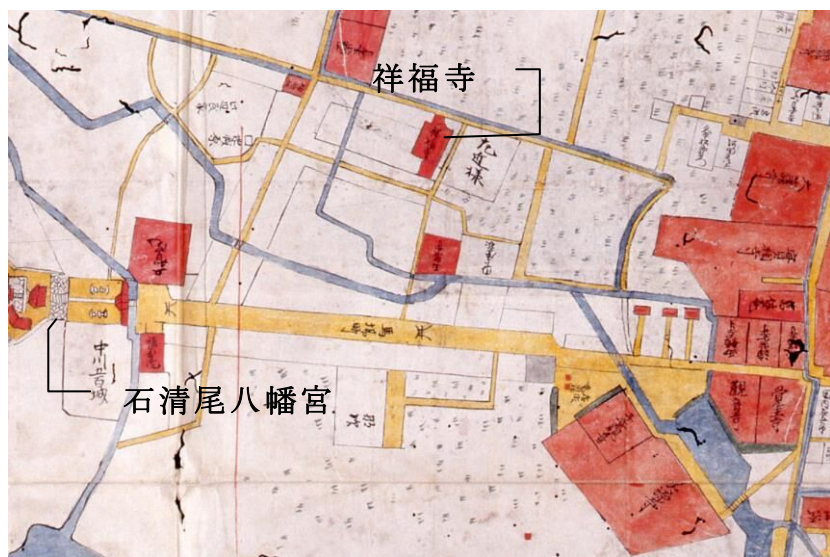
出土遺物の中には窯の築造年代より遡って、白鳳期（飛鳥時代後半）の鴟尾しび（注2）の破片や、坂田廃寺から出土した瓦と同範の軒瓦などがあります。岡山県邑久郡牛窓町にある寒風古窯跡群さふかぜこようせきぐんから出土する鴟尾と類似しており、その関係が注目されています。

（注2） 鴟尾

瓦葺屋根の大棟の両端につけられる飾りの一種で、訓読みでは「とびのお」と読みます。脊くつに似ていることから脊形くつがたとも呼ばれ、飛鳥時代からすでに鴟尾が作られており、飛鳥寺から古いタイプのものが出土しています。白鳳期の鴟尾には胴部に珠文帯を設けたり、腹部に蓮華文を飾ったり装飾性が豊かなものとなります。中世になると魚形に変化して鯢しやういに代わりました。

4 祥福寺

祥福寺は江戸時代、初代高松藩主松平頼重公に招かれた鶴洲和尚が開山した寺院です。元は見性寺の塔頭で自性院と呼ばれており、宮脇村にありました。天保年間（1830～44）の城下絵図にも、石清尾八幡宮参道の北側にその名前が見えます。享保11年（1726年）二代藩主頼常の時に禅宗の一派である黄檗宗本山満福寺の末寺として創建された後、曹洞宗に改宗しました。五百羅漢寺とも称され、民衆の信仰を集めました。太平洋戦争の高松大空襲で焼失。昭和42年（1967年）に高松市宮脇町から現在の地に移転、昭和63年に伽藍を再興して今日にいたっています。曹洞宗の認可参禅道場として、坐禅会を主催されています。



讃岐高松城下絵図（天保年間）

5 祥福寺開祖鶴洲靈鷲（かくしゅうれいこう）

祥福寺を開いた僧鶴洲靈鷲（正保年間（1644〜48）〈享保16年（1731年）は、俗名を住吉広夏といい、住吉派を起こした大和絵の幕府御用絵師、住吉如慶の子として生まれました。兄の具慶とともに画業を継ぎ、具慶は父如慶に続いて幕府御用絵師となります。広夏は加賀藩に抱えられますが、一説に耳を病んだことから加賀藩を辞し、宇治黄檗宗の万福寺に身を寄せたといわれています。

病で絶望の淵にあった鶴洲は、万福寺で画僧として再起を果たし、黄檗僧櫟隠和尚の弟子となって摂津高智寺で出家、鶴洲靈鷲（かくしゅうれいこう）を名乗りました。のちに高松藩祖松平頼重の招きにより高松を訪れ、終には見性寺の塔頭で宮脇村にあった自性庵に身を置きます。そして齢八十も超えた享保11年（1726年）頃に自性庵を祥福寺

に改めて黄檗宗の末寺とし、ここに生涯を終えました。県下には、法然寺が所蔵する観世音功德図屏風（重要文化財）をはじめ、鶴洲が遺した秀作がいくつか伝えられています。



鶴洲靈鷲画 文殊菩薩図

6 生目神社

九州宮崎にある生目八幡宮から勧進され、あくしちべいかげきよ悪七兵衛景清

をお祀りしています。俗に「いきめさま」と呼ばれていま

すが、正式には「いくめさま」です。祥福寺の駐車場から

墓地横を通り、更に奥へ進んだ所に社殿が建っています。

古くから眼疾に靈驗あらかたと伝えられ、「眼をひらく」こ

とから転じてよろずの願いがかなうお社として信仰されて

います。

祭神の屋島合戦「鋌引き」(注3)で有名な悪七兵衛景清(藤原景清)は、武勇の者として名を馳せました。源平の合戦で敗者となった平家の武将景清を、源頼朝は自分の家来として召し抱えたいと思いますが、景清はその申し出を断って、西国に流してくれるようにと願いました。日向国に落ち着いた景清ですが、源氏の隆盛を見聞することにより煩悶し続け、その苦しさから逃れるために、自分で自分の両眼をえぐって空に投げました。両眼は生目の地の松の木(目掛けの松)にまで飛んで行きました。その両眼を、目の神様として祀ったのが生目八幡宮(宮崎市)です。県下でも数少ない神様と言えます。

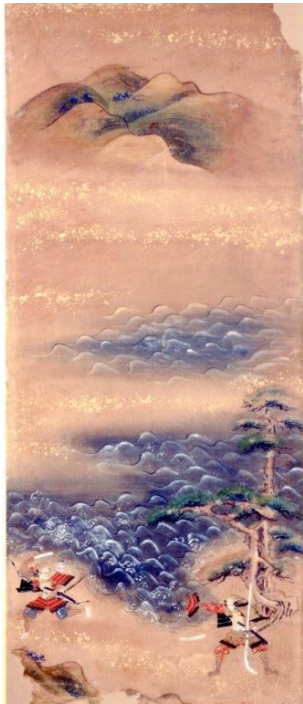


生 目 神 社

(注3) 鋕引き

平家物語卷十一、屋島合戦が描かれています。那須与一扇の的が終わった後、与一が老兵を射たことで再び戦闘が始まり、悪七兵衛景清の「鋕引き」「義経の弓流し」へと続いていきます。

「楯の陰より、長刀打ち振てかかりければ、美尾屋十郎、小太刀、大長刀に叶はじとや思ひけん、かいふいて逃げければ、やがて続いて追っかけたり。長刀にて薙がんずるかと思ふ所に、さはなくして、長刀をば弓手の脇にかい挟み、馬手の手をさし延べて、美尾屋十郎が甲の鋕を掴まうとす。掴まれじと逃ぐる。三度掴みはづいて、四度の度、むずと掴む。しばしぞたまつて見えし。鉢附の板より、ふつと引き切つてぞ逃げたりける。残り四騎は、馬を惜うで駆けず、見物してぞ居たりける。美尾屋十郎は、御方の馬の陰に逃げ入つて、息続き居たり。敵は追うても来ず。そののち甲の鋕をば、長刀の先に貫き、高く差し上げ、大音声を挙げて、「遠からん者は音にも聞け。近くは目にも見給へ。これこそ京



源平合戦図屏風
しころ引き

童^{わらん}の呼ぶなる、上総の悪七兵衛景清よ」

鋳引きの場面は、悪七兵衛景清が美尾屋十郎の鋳を引きちぎる瞬間を、息もつかせぬスピード感で描いています。平家物語全十二巻中数々あるエピソードの中でも軍記物語の真骨頂と言えます。

7

観賢上人^{かんけんしやうにん}

観賢上人は、真言宗の高僧で、香東郡坂田郷（現高松市西春日町あたり）の秦氏出身です。真言宗の僧である聖宝（理源大師）に見出されて上洛し、真雅（法光大師 空海の実弟）にも仕えました。般若寺（奈良）を開き、般若寺僧正と呼ばれました。聖宝没後に東寺長者となり、さらに醍醐寺初代座主、高野山検校、仁和寺別当を兼ね、学徳一世に高く、文殊の化身とも言われました。空海没後80年を経て、東寺派と高野山金剛峰寺派に二分されて衰退しなかった真言宗の再興に貢献しました。また、空海への大師号追贈に力を尽くし、高野山奥院の廟前に報告、大師入定留身説^{にやうじやうるしん}（注4）を唱え弘法大師信仰の基礎を固めました。

(注4) 入定留身説

弘法大師空海は62歳で亡くなりました。通常僧侶の死は入滅、入寂などと表現されますが、空海に限っては入定の語が用いられます。入定とは空海が和歌山県高野山の奥の院の御廟において、即身成仏をし、禪定に入っていることを意味しています。弘法大師は現在もこの世に肉身を留めて、56億7000万年のちに弥勒菩薩がこの世に出現するまでの間、衆生救済のために精進されているという信仰です。大師の入定留身信仰に伴って、高野山では毎年、旧3月21日の正御影供に衣替えの法要が営まれています。

《聖宝と観賢の出会い》

観賢は、秦氏の出身で、幼名を阿古磨あこまろといい、その才能は、僧聖宝（理源大師）に見出され、花開きました。聖宝は、師の真雅（法光大師 空海の実弟）の怒りにふれて勘当され、空海出身の地である讃岐に身を寄せて修行の旅を重ねていたとき、坂田郷で手水ちようずを使おうと思い、遊んでいる子供たちに尋ねると、1人が案内しようとして立ち上がり、他の1人が、「あの水は不浄だから洗っても無駄です。」



観 賢 堂

といました。聖宝は、「仏の道という諸法では、浄、不浄の区別はないから、かまわない。」
といいながら水の方へ行こうとしたそのとき、阿古麿は「諸法に浄・不浄がないものなら、
お坊様はなぜ手の不浄をお洗いになるのですか。」と尋ねました。聖宝は阿古麿が神童であ
ることを見抜き都に連れ帰りました。貞観4年（862年）阿古麿9歳の時でした。聖宝
は仁和寺に身を寄せて、昼は托鉢をしながら、阿古麿を養い、夜は学問を教えました。阿
古麿は聖宝の師真雅の教えも受け、東大寺で得度して観賢と名乗りました。

8 観賢山久米寺 観賢堂

旧国道32号線の西ハゼバス停に並行して、東側を走る昔のこんぴら街道にはさまれた
ところに観賢堂があります。このお堂の周囲には「観賢

御廟」「弘法大師剃刀塚」の石碑が建っています。

かみそりづか

剃刀塚は、空海没後86年目の延喜21年（921年）

に大師号追贈報告のために、観賢僧正が高野山の霊廟を
開いた際、伸びていた空海のヒゲを剃ったという剃刀を
讃岐に持ち帰り、埋めたのがこの塚だということです。



かみ 剃
そり 刀
づか 塚

【参考文献】

『高松市史Ⅰ』昭和39年12月15日発行 高松市役所

『角川日本地名大辞典 香川県』昭和60年発行 角川書店

『第11回特別展讃岐の古瓦』平成8年1月発行 高松市歴史資料館

『わが町の文化財探訪』平成19年3月31日発行 高松市文化財保護協会

『片山池窯跡群く確認調査報告書』平成21年3月発行 高松市教育委員会

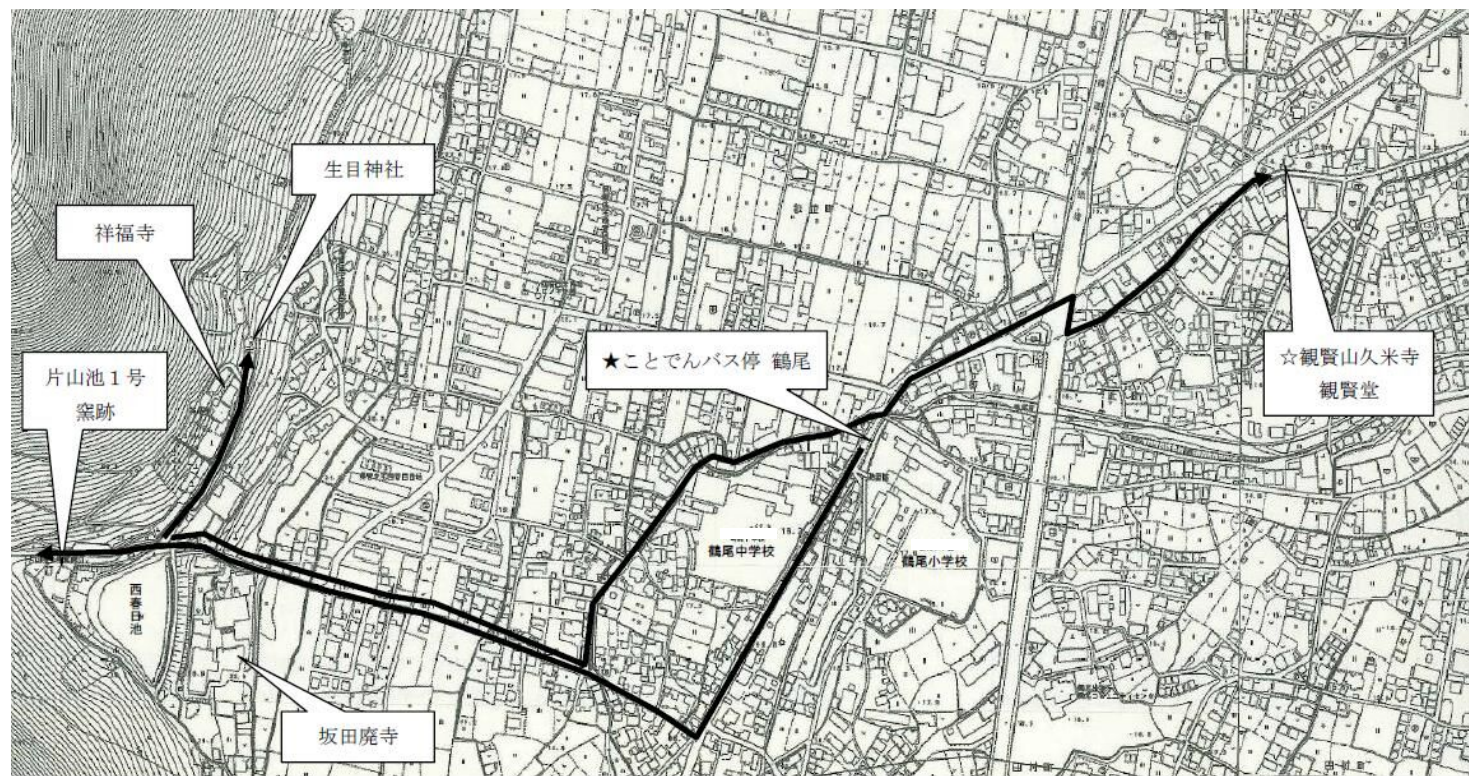
『讃岐人物風景 古代の名僧と宰相』昭和55年9月10日発行 四国新聞社

『鶴洲靈鷲について』五十嵐公一 『季刊雑誌古美術』平成5年 三彩社

『讃岐国名勝図会（前編）』（版本地誌大系）平成11年 臨川書店

『わが町の文化財探訪』平成19年3月31日発行 高松市文化財保護協会

『日本靈異記』（平凡社ライブラリー）平成12年1月24日発行 平凡社



★…出発地点、☆…終着地点

2月28日（日）鶴尾からの復路

◆ことでんバス由佐・御厩線（上り）

（西はぜ）	（瓦町）	（高松築港）	（高松駅）
11:57 →	12:09 →	12:18 →	12:20
12:21 →	12:34 →	12:43 →	12:45



次回のふるさと探訪は…

テーマ 龍満池周辺を歩く（予定）
と き 平成28年3月20日（日）
9：30～12：00頃

集合場所 香川支所（駐車場の準備はありません）
講師 佐野 通明さん

☆公共交通機関をご利用ください。

☆広報「たかまつ」3月1日号に開催案内を掲載します
ので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、

文化財課（TEL839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）で
お知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★次回の交通案内★

◆ことでんバス塩江線下り

（高松駅）	（高松築港）	（瓦町）	（川東）	香川支所
8:25 →	8:27 →	8:35 →	9:07 >>>	北東へ徒歩5分

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※参加中は、次のことに充分留意し、
意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一行で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気を
つけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。